

「学としての形而上学」とはなにか

—「純粋理性の建築術」及び「形而上学の進歩」を手掛りにして—

稲岡 栄次

はじめに

批判期のカント第一の著作『純粋理性批判』(以下『批判』)は「予備学(Propädeutik)」としての役割を担わされている(BXLIII, A11/B25, A841/B869)⁽¹⁾。それは「純粋理性の体系のための予備学」であり、すなわち「形而上学のための予備学」である。カントにおいて「形而上学(Metaphysik)」は、それが件の「批判(Kritik)」を踏まえる場合、「学(Wissenschaft)」の資格を得る。その限りで、純粋理性の批判は〈学としての形而上学(Metaphysik als Wissenschaft)〉へと通ずる理性の歩みであると言える。

ところが『批判』におけるカントによる〈学としての形而上学〉についての言説は不評を買うことが少なくない。特にこの種の言説が顕著な「純粋理性の建築術」(以下《建築術》)の章は、アディッケス(Adickes, 1889)=ケンプ・スミス(Kemp Smith, 1918)による解釈以来、「没批判的」或いは「前批判的」であるとの否定的評価を被ってきた。この解釈に従えば読者は、件の《建築術》が「超越論的方法論」の第3篇として、つまり『批判』の殆ど最後の章として『批判』のそれまでの歩みを踏まえているものと期待する極自然な見方を放棄しなければならない。

しかしこの事態の責任は、思うに、『批判』の著者よりはむしろその読者に帰せられるべきものである。多くの読者を躓かせる憶見は、敢えて単純化すれば恐らく、以下のように表現できよう——すなわち「超越論的弁証論」(以下《弁証論》)において批判的認識論が形而上学の独断を徹底的に暴露した今、なんであれ「形而上学」と名のつくものがどうして再び批判哲学の表舞台に堂々と登場してよいはずがあるか」と。この種の憶見は〈学としての形而上学〉の本性が十分に理解されるならば、容易に退けられる。確かに批判主義によれば、一方で形而上学は独断論としては容赦されるべくもない。しかし他方で独断論だけが形而上学であるわけでもない。『批判』において形而上学はなお、独断論とは全く別の仕方、学として、理性によって正当と言われる可能性を持っている。

とはいえ、いかにして独断論とは全く別の仕方での形而上学が可能であるのか。いったい〈学としての形而上学〉とはなにか——本論はこのことを理解するための努力の一環である。私はこの仕事に臨むのに、今言った《建築術》と併せて『形而上学の進歩』に関する

懸賞論文』(以下『進歩』)を手掛りとした。実際この『進歩』は、《建築術》を『批判』の本体及びその精神と無縁の箇所として軽視する解釈から一旦距離を置き、『批判』の中で《建築術》が持つ積極的な意味を再考するよう私達を促すような言説を豊富に含んでいる。

もっとも成立時期も編集事情も異なる二つの著作⁽²⁾を無差別に参照して同一の〈学としての形而上学〉を理解しようと試みた本論の手法、とりわけ懸賞論文として準備されたしかも未完成の原稿の寄せ集めである『進歩』の本論での取扱に関しては、カント解釈の方法としてそれが孕んでいる問題も少なからず予想される。或いは「形而上学の進歩」という概念のカントによる使用自体に対して「懸賞問題⁽³⁾」が機会原因として作用したことは否定できない。しかしこの「形而上学の進歩」の名の下にカントが描き出す「独断論・懐疑論から批判主義へ」という図式自体は『批判』にも繰り返し登場するし⁽⁴⁾、少なくともカントにおける形而上学の理解がその基本的な部分で『進歩』・《建築術》双方で共通していることは以下本論がはっきり示す通りである⁽⁵⁾。

1. 〈批判的形而上学〉

そこで第1章の目的は、〈学としての形而上学〉をまずは「独断論(独断的形而上学)」から峻別することである。カントにおいて〈学としての形而上学〉が一切のア・プリオリな純粋認識に関する理性の能力を研究する批判を予備学とする純粋理性の体系であるのに対して(A841/B869)、「独断論」は理性自身の能力を予め批判せずにやってゆく純粋理性の越権であるから(BXXXV)、二つの形而上学の違いは「没批判的(前批判的)形而上学」と「批判的(後批判的)形而上学」の違いでもある。この〈批判的形而上学〉と〈独断的形而上学〉の相違は『進歩』におけるカントの論述に詳しい。そこで本章ではその論述からカントにおける〈批判的形而上学〉の特徴を抽出し、それを〈独断的形而上学〉に対するカントの批判と対照しつつ、二つの峻別に努める。

そしてその際私達の出発点となるのは、カントが一般的に「形而上学」に対して与えた次の定義の独自性である——すなわちカントによれば、

全形而上学が目標としている究極目的は容易に発見することができる。そしてこの究極目的を考慮して形而上学の一つの定義——「形而上学は感性的なものの認識から超感性的なものの認識へと理性によって進歩する学である」——を基礎付けることができる。(XX260)

この定義は『進歩』の「序文」に登場する。この定義の第一の独自性は、それをカントが

形而上学の対象のみを考慮して与えているのではなく、「目的 (Zweck)」をも考慮して与えている点にある⁽⁵⁾。それともう一つ、カントによれば形而上学のこの究極目的 (超感性的なものの認識) は形而上学においてたんに「のぞまれるもの (was man will)」ではなく、「なされるべきもの (was zu thun sey)」・「なされるべきであったもの (was hätte gethan werden sollen)」でもある (XX261)。この点も注目に値する。つまり形而上学の究極目的は、もちろん認識ではあるが、しかし同時に実践的性格を帯びた認識である。第1章では以上二点に注意しつつ、〈批判的形而上学〉と〈独断的形而上学〉の相違を明確にする。

1.1 形而上学の究極目的としての超感性的なものの認識

今注意した内の第一点が〈批判的形而上学〉と〈独断的形而上学〉の決定的な相違を示唆する。それはこの両者における「超感性的なもの」が占める言わば「地位 (status)」の相違である。

カントによれば、〈独断的形而上学〉は専ら存在論の限界内を、しかも前批判的な存在論の限界内を歩んでいる (XX281)⁽⁶⁾。この前批判的存在論的形而上学は「概念を事柄と看做し、また事柄を、またはむしろ事柄の名前を概念と看做す」 (XX302)。このような存在論においては、なんであれその概念が論理的に可能的なものは、そのことによって「存在者⁽⁷⁾」のうちに数え入れられる。こうした存在論のために〈独断的形而上学〉において「超感性的なもの」は——それをひとまず論理的可能的なものとして看做すにせよ、そのうえ客観的実在的なものと僭称するにせよ——まずもって「存在者」として論理的存在論的地位において考えられる。

これに対して〈批判的形而上学〉において「超感性的なもの (の認識)」はその「究極目的」として哲学的目的論的⁽⁸⁾地位において考えられる。そしてこれは以下第2節で詳細に確認することだが、カントにおいて「超感性的なもの」の概念に客観的実在性が付与されるのは「たんに我々に対する諸々の道徳法則の要求に基づいて」 (XX299)である。つまり概念が客観的実在性を得るために論理的可能性以上のものが必要とされる。したがって〈批判的形而上学〉はたんなる論理的可能性と客観的実在性を一緒くたにする種類の独断論ではないし、もちろん我々の認識を完全に超越した対象の現存在を証明する実在論でもないのである⁽⁹⁾。

1.2 実践的定説的認識としての超感性的なものの認識

しかしそれでは前批判的独断論とも超越的実在論とも異なる仕方での〈批判的形而上学〉における「超感性的なものの認識」とはなんなのか。或いはたんに我々に対する諸々の道

徳法則の要求に基づいて超感性的なものの概念に客観的实在性が付与されるとはどのようなことなのか。その解釈次第では〈批判的形而上学〉はまたしても〈独断的形而上学〉と混同されかねない。そこで本節ではこの「超感性的なものの認識」について——カントはこの認識を「実践的定說的 (praktisch=dogmatisch) ⁽¹⁰⁾」という形容詞でもって特徴付けているが——その源泉・内容・限界を確認したい。

第一に、超感性的なものの認識の起源に関して言えば、それは或る種の「必要 (Behuf)」から生ずる。超感性的なものの認識が必要となるのは結局純粹実践理性がこの世界で可能な限りでの最高善(理性的存在者の幸福及びその幸福に相応しい人倫的合法的な振舞い)を究極目的とする限りでのことである——すなわちカントによれば、

理性のこの対象 [=この世界で可能な限りでの最高善] は超感性的である。究極目的としてのこの対象へと進歩することは義務である。……しかしながらこのこと [=究極目的への進歩] は理論が全然ない場合には不可能である。というのもこの究極目的は完全に我々の力の及ぶ範囲にある、といったものではないからである。ゆえに我々はこの究極目的がそれを起源として生じうる源泉に関する理論的な概念を自ら作らなければならない。(XX294, 括弧内引用者)

かくして超感性的な究極目的の遂行を可能にする超感性的な源泉に関して理論的な概念を自ら作る必要が生ずる。そしてそこで必要とされる理論や概念を作るのが『進歩』という「形而上学の第三段階」、つまり批判主義の段階における〈批判的形而上学〉であり、ここで作られた概念に基づいて超感性的なものの実践的定說的な認識が可能になるのである。

第二に、今言った意味での「実践的定說的」な認識の内容とは言えば、それは自由・神・不死性である。これらの客観はいずれも究極目的のための「条件 (Bedingung)」として我々によって自ら作られ表象される。第一の自由の理念は、我々人間が叡智的存在者としてこの感性的世界において究極目的に合致しうる能力としての「純粹実践理性の自律」として表象される。第二に神の理念は、道徳性がこの世界でそれ相応の幸福に与るための条件としての「道徳的な世界創始者」として表象される。第三の不死性の理念は、究極目的を目指す無限の前進のための条件としての「我々の現実存在の永続」として表象される(XX295)。

第三に、以上の認識の限界に関して言えば、この認識の信憑の様相は「信仰 (Glauben)」に過ぎない。言い換えれば、「想定」・「前提」・「仮説」である(XX297)。それは確かに道徳的意図においては必然的である。しかし逆に言えば、「我々はたんに我々に対する諸々の道徳法則の要求に基づいてそれらの客観を、つまり神・実践的な質の自由及び不死性を自ら

作り、それらに自ら客観的実在性を与えるに過ぎない」(XX299)。その意味で実践的定說的認識の三つの客観は「純粹実践理性の三箇条の信条における信仰告白⁽¹¹⁾」(XX298)の内容としてのみ客観的に実在的であるに過ぎないのである。超感性的なものの認識へと実践的定說的に進歩する学としての形而上学はこの点でも徹底して批判的である⁽¹²⁾。

2. 〈学としての形而上学〉

しかしながら第1章で『進歩』を手掛りに確認した〈批判的形而上学〉の二つの枢要——「〈批判的形而上学〉は哲学的目的論的でなければならない」・「〈批判的形而上学〉は実践的定說的でなければならない」——は、《建築術》を参照する限り、〈学としての形而上学〉にも当て嵌まる。というのは、一つにはそこでカントが「学」に与える定義が〈学としての形而上学〉を「理性の統治」の下にある「目的の統一」においてみることを必然的にし(A832/B860)、二つにはそこでカントが「人間理性の目的論」としての「世界概念⁽¹³⁾に従った哲学」に訴えて〈学としての形而上学〉が道徳的な「人間の全使命」のための手段たることを必然的にするからである(A839f./B867f.)。第2章ではこの二点を確認するが、第1章の内容と併せて考えれば、このことはカントにおいて形而上学が学として建築術的統一を得るならば形而上学は同時に批判的でなければならないことの裏付けともなる。

2.1 〈純粹理性の建築術〉と目的の統一

ところで《建築術》はまさに「学としての形而上学はいかにして可能であるか」(B22)という純粹理性の本来的課題に対してカントが批判の道の果てに遂に解決を与えた場所であると考えられる。そしてこの課題を解決するための最後の歩みとして、カントは少なくとも次の二つのことを達成する必要があった。それはまず第一に、形而上学に（したがって——カントにとっては同じことだが——我々の理性に）「一定の確実な制限を設ける」こと⁽¹⁴⁾、そして第二に、この制限が許す限りで「我々の理性を信頼して拡張する」こと⁽¹⁵⁾である(ibid.)。思うに、前者は本節で確認する〈「学」の定義〉に、後者は次節で主題となる〈人間理性の目的論〉に深く係る。

カントによれば、一般的に言って、学の設定は「理念 (Idee)」を要する。というのは学とは認識の単なる「寄せ集め (Aggregat)」ではなく、むしろ一つの「体系 (System)」であって、しかも体系とは「一つの理念の下での多様な認識の統一」だからである(A832/B860)。そしてこのことは独断論にとっても批判主義にとっても、はたまた懐疑論にとっても、人が学的方法を採る以上は不可避の前提である(A856/B884)。

しかしながら「学」についてのこの一般的な理解だけでは形而上学が学の確実な歩みに

至ることはなかった。それはたぶん上記の理解が、それが諸学の体系的統一の理念が存する言わば「所在 (position)」に関する問題を野放図に放置していることによって、形而上学の体系的統一の理念が超越的な領域に独断的に設定される温床となったためである⁽¹⁶⁾。しかし我々人間の認識能力を超えた所に一度この種の独断的理念 (超越的原理) が設定されてしまうと、それは経験の試金石はおろか、我々人間の認識能力に基づいて使用可能な一切の試金石を承認せず、その場合に形而上学は様々な詭弁が幅を利かし無益にも相互に試し合う「戦場 (Kampfplatz)」(AVIII)となるのである。

それに対して《建築術》におけるカントの〈「学」の定義〉は諸学の体系的統一の原理を「目的的原理」と明確に規定し、諸学の体系的統一を「目的の統一」＝「建築術的統一」として特徴付ける(A833/B861)⁽¹⁷⁾。しかしそれはまた、私達が第1章第1節で確認したことを踏まえて考えれば、諸学の体系的統一の原理の存する所在をまさに我々の理性の内と見定めることを意味している⁽¹⁸⁾。したがって《建築術》での〈「学」の定義〉によってカントは〈学としての形而上学〉を「理性の統治」の下に置くことで我々人間の認識能力を超えて行く形而上学の「抜け道」(XX303)を塞ぎ、形而上学に一定の確実な制限を設けたと言えよう。

2.2 〈人間理性の目的論〉と人間の全使命

しかし今言った「理性の統治」は形而上学を制限するおもしろいだけであるだけでなく、その制限が許す限りで形而上学を可能にするかなめにもなる。ただしそのために《建築術》においてカントはもう一步踏み出す必要があった。そしてそれが「人間理性の本質的諸目的に対する一切の認識の関係についての学 (人間理性の目的論 (teleologia rationis humanae))」(A839/B867)とも呼ばれる「世界概念に従った哲学」に訴えて「道徳」(「道徳哲学」)(A840/B868)の対象である理性の「実践的使用」(A841/B869)を理性の「最高目的」(A840/B868)にして「人間の全使命」たるものとして指定することであり、理性の思弁的使用——すなわち形而上学⁽¹⁹⁾——をその手段として必然化することであった。

この意味での〈人間理性の目的論〉は〈学としての形而上学〉を可能にするうえで不可欠の条件をなす。このことは、《建築術》における「人間の全使命」を『進歩』における「義務」(XX294)——純粹実践理性の究極目的にしてそれ自体が超感性的な対象でもある「世界において可能な限りでの最高善」(ibid.)へと進歩すること——と同じものとするならば、すでに第1章第2節において確認した経緯より明白である。というのもカントにおいては純粹理性の実践的関心に由来するこの「進歩」という「義務」ないし「使命」がなければ、形而上学の究極目的に関わる諸認識に (つまり超感性的なものの認識に、言い換えれば、

超感性的なものを目指して経験の限界を超えて行く理性の思弁的使用に基づく認識に) 正当に客観的実在性を付与するものは他にない⁽²⁰⁾からである。

したがってカントにおいて人間理性の内の思弁的なもの与实践的のものは一方から他方が逃れられない関係にある。『批判』第1版の「序文」でカントは「人間理性がその或る種の認識において持つ特殊な運命」(AVII)として人間理性の思弁的関心について語っているが、今言った〈人間理性の目的論〉と〈学としての形而上学〉の関係を踏まえれば、まさにそれゆえに「他の一切の理性の営みに対して道德哲学が持つ卓越性」(A840/B868)やいわゆる実践的理性の優位もまた人間理性の持つ特殊な「運命」⁽²¹⁾である。ところがすでにみたように、我々がいざこの世界において可能な限り最高善へと進歩するとなると「このことは理論が全然ない場合には不可能である」から(XX294)、人間理性はこの最高善への接近の可能性の条件としての神・自由・不死性といった客観を、少なくとも「これらの対象が現実的に存在することをあたかも我々が知っているかのように行爲する」べきである限りにおいて(XX298)、自ら作る「必要」がある。

したがってカントにとって〈人間理性の目的論〉の下で〈学としての形而上学〉を建築するという事は、今言った意味で思弁的であるということから実践的でもなければならぬ理性の関心を「人々の持ちうる限り最も切なるもの」(XX260)として、そして特殊な運命として受容することを意味している。人間のうちに思弁的関心があり、実践的関心がある限り（そしてそれ以外の何物も必要ではないのだが）、〈学としての形而上学〉は廃墟となることはない。しかし「もしも理性の寄せる関心が人々の持ちうる限り最も切なるものでないとするならば、人間は遂にいつの日かシシュポスの石を絶えず転がし続けることを止めなければならなくなるだろう」(XX259f.)。

3. 狭義の形而上学の体系

最後に第3章の目的は、《建築術》に纏わり付いている二三の不審の種を取り除くことにある。この不審の種を放置すれば、そのために《建築術》におけるカントの言説は敬遠されてしまい、さらにはその言説が持つ「学的重要性」も見落されてしまうかもしれない(ケンプ・スミス(Kemp Smith, 1918, p. 579)によってそうされたように)。その不審の種とは、第一に、カントが狭義の形而上学⁽²²⁾の体系に対して加えた余りに整然とした区分である。これはカントの「体系趣味」としてアディッケス(Adickes, 1889, S. 633, Anmerkung)によって揶揄される。しかも第二に、その区分のためにカントは彼自身が《弁証論》で批判していたものに付していたのと同じ名称——「合理的心理学」・「合理的宇宙論」・「合理的神学」——を使用しているため、カントにおける〈学としての形而上学〉は結局〈独断的形

而上学)の焼直しであるとの誤解を招く危険性をも孕んでいる。そこで以上二点についてカントを弁護しておきたい。

3.1 建築術的体系

問題の形而上学の体系は「1. 存在論 (Ontologie)。2. 合理的自然学 (rationale Physiologie)。3. 合理的宇宙論 (rationale Kosmologie)。4. 合理的神学 (rationale Theologie)」(A846/B874)の四部門へと区分され、そのうち合理的自然学はさらに二つの下位区分として「合理的物理学 (physica rationalis) と合理的心理学 (psychologia rationalis)」(A847/B875)を含む。そこでまずは問題の解決の準備として、存在論・自然学・宇宙論・神学の内容を《建築術》におけるカントの説明を参照しつつ検討してみよう。

第一に存在論について。それは「諸対象一般に関係する一切の概念と原則の体系において悟性と理性自身を考察する」(A845/B873)。ちなみにカントがここで「悟性」に強調を置くのは、「諸対象一般に関係する唯一の概念」が「カテゴリー」であり(A290/B346)、つまり純粋悟性概念であって、したがって存在論の核心が悟性の形式に係るからであろう。言い換えれば、存在論において形而上学が考察するのは、悟性の形式の下で対象についての思惟及び判断がなされる限りその悟性の形式ゆえに諸対象一般にア・プリオリに妥当する純粋な悟性認識の様式である。カントがこの存在論を特に「超越論的哲学 (Transzendentalphilosophie)」(ibid.)と名付ける理由もこの点にあると思われる⁽²³⁾。

第二に自然学について。それは「その認識が経験において(具体的に)適用されうる限りにおいて、自然に係る」(ibid.)。つまり自然学は、先行する第一部門(存在論)を踏まえて、さらに経験(経験的認識)に係るとも言えよう。ゆえにこの部門で形而上学は、感性において「与えられる対象」を(ただしここではたんに「合理的 (rationalis)」に、つまり与えられる対象の概念からのみではあるが⁽²⁴⁾ 考察するべく視野に収めるに至る(ibid.)。言い換えれば、自然学において形而上学が考察するのは、感性的直観において与えられる対象のア・ポステリオリな経験的認識の様式である。以上のような形而上学の歩みによって、自然学以下の三部門(自然学・宇宙論・神学)における形而上学は「純粋理性の自然学 (Physiologie der reinen Vernunft)」と呼ばれて先の「超越論的哲学」から区別される(ibid.)。

最後に宇宙論及び神学について。これらはさらに「経験の諸対象の連結」を「一切の経験を越え出て」考察する(A845f./B873f.)。つまり先行する第二部門(自然学)を踏まえて、しかし新たに総じて超越的連関に係る。ゆえにこの第三部門(宇宙論)・第四部門(神学)は、先行する第二部門(「内在的自然学 (immanente Physiologie)」とも呼ばれる)との対比から、「超越的自然学 (transzendente Physiologie)」と呼ばれる(A846/B874)。またこの第三

部門と第四部門の区別に関して言えば、それは各々の部門で考察される超越的連関の相違に由来する。すなわち超越的連関には二通りあって、その一つは「可能的経験を超え出た内的連結」としての「全自然」の（経験の全対象の相互の）連関、もう一つは「外的連結」としての「全自然と自然を超えた或る存在者との連関」であるが、前者を考察するのが宇宙論、後者を考察するのが神学である(ibid.)。ただしこの宇宙論及び神学について注意すべきは、それが「超越論的世界認識 (transzendente Welterkenntnis)」及び「超越論的神認識 (transzendente Gotteserkenntnis)」とも呼ばれる点である。つまり宇宙論及び神学が考察するのは、世界や神といった対象というよりはむしろ、世界や神といった対象についての我々のア・プリオリな認識の様式である。ところで周知のとおり、カントにおいて「世界」及び「神」の概念は理性の理念である。したがって、言い換えれば、宇宙論及び神学は「宇宙」と「神」という各々の理念からのア・プリオリな認識の様式を考察するのである⁽²⁵⁾。

以上がカントにおける狭義の形而上学の体系の四部門の内容についての一応の説明であるが、問題はこの体系の区分に合理的・批判的に正当な理由があるか否かである。もちろん理由はある。そしてその理由を理解するためには、『進歩』においてカントが「形而上学の第三段階」を「神学に通じかつ神学を必然的なものにする一切のア・プリオリな認識を伴う神学の段階」(XX281)と呼ぶことに注意するとよい。さてすでに私達がみたとおり、この第三段階における形而上学こそ実践的定説的な仕方による(批判的形而上学)、哲学的目的論的な仕方による(学としての形而上学)である。してみれば狭義の形而上学の体系の第四部門(「神学」或いは「超越論的神認識」ということでカントが理解するもの)やはり、形而上学が今言った仕方ですべて初めて達成する事柄であり、つまり形而上学の究極目的である超感性的なものの実践的定説的認識、及びこの種の認識に対して人間理性の目的論が指定する可能性及び限界の認識であるということは今や明らかである。

以上のことを踏まえれば、件の形而上学の体系がその神学とともに存在論・自然学・宇宙論を含まなければならない理由も明らかである。というのも我々が存在論(超越論的哲学)・自然学(内在的自然学)・宇宙論及び神学(超越的自然学、すなわち超越論的世界認識及び超越論的神認識)という各々の部門において悟性の形式、感性的所与、さらに経験の限界を超えて行く理性について認識していなければ(これらの認識のうちの一つでも我々が欠いているならば)、その場合には人間理性のあの究極目的(「この世界(感性的世界)において可能な限りでの最高善への進歩」)はその実践的で純粋な理念としての意味を我々に十全に開示しえないからである。言い換えれば、その場合には我々は思惟・経験・思弁のそれぞれの限界を踏まえないがゆえに、超感性的なものの認識を可能にするための要石としての実践的で純粋な理念の必要性をも認識することができないからである——し

かしこの理念の必要性の認識こそ同時にまた、これまでに述べたように、超感性的なものの認識の可能性及び限界の認識なのであり、それゆえに神学（超越論的神認識）の核心なのである。したがって形而上学が神学において今言った超越論的な認識を踏まえて（その意味で批判の道を経た学的な仕方）その究極目的に到達すべきである限り、存在論・自然学・宇宙論はこのような形而上学にとって不可欠の要素である。この意味で件の形而上学の体系は確かに建築術的な理由に基づき、その限りで合目的な秩序を持つのである⁽²⁶⁾。

3.2 《建築術》と《弁証論》

最後にもう一つ、《弁証論》と《建築術》の関係に関して言えば、《弁証論》においてカントが批判したのは〈学としての形而上学〉そのものではなく、まだその進歩の途上にあった形而上学の誤った試み、その意味での〈独断的形而上学〉の諸相であったと言えよう。

すでに第1章第1節でも触れたが、〈独断的形而上学〉は前批判的存在論である。それは、言い換えれば、理性能力一般の批判を欠いた存在論、自己を過信した存在論である。〈学としての形而上学〉において初めて神とともに自由・不死性が実践的定説的に認識されることを考えれば、〈独断的形而上学〉にいう「心理学」・「宇宙論」・「神学」は全てその目的を遂げるにはなんらかの越権を犯さざるをえない。実際第一の「心理学」の名の下に試みられた魂の不死性の証明は、実のところ心理学には過大な要求を含んでいる。第二の「宇宙論」において辛うじて救われうる自由も、それだけではなお客観的実在性という点では不十分な思弁的理念に過ぎない。第三の「神学」における神の存在論的証明に至っては、概念の論理的可能性をそのまま対象の客観的実在性と同一視する点で完全な誤謬に陥る。

これに対して〈学としての形而上学〉の下にある心理学・宇宙論・神学は、経験の感性的制約・思弁的理念の性質・実践的理念の必要性など、自己の可能性及び限界を規定するものについて認識し、自身を独断的な存在論から区別する。したがって《建築術》における心理学・宇宙論・神学は《弁証論》における同名の各部門から当然区別されよう。

おわりに

以上によって本論はカントにおける〈学としての形而上学〉を理解するための一助となり、〈独断的形而上学〉とは異なるもう一つの形而上学の可能性に触れえたものとした。それは独断論のように超越的な「存在」へと浮遊する形而上学ではなく、私達自身の「理性」に定位した人間的な形而上学である。私達が人間理性の関心に耳を傾け、まさにこの世界において可能な限りでの一切の善なるものへと進歩しようとする限り、〈学としての形而上学〉というこの純粹理性の建築物は私達の内に立ち続けるであろう。

註

- (1) カントの著作からの引用は、『純粹理性批判』から引用した場合には原版の頁番号（第一版のものはAに続けて、第二版のものはBに続けて）で引用箇所を示した。それ以外の著作から引用した場合にはアカデミー版カント全集の巻数（ローマ数字）と頁番号（アラビア数字）で引用箇所を示した。
- (2) 『批判』の第1版が出版されたのは1781年。『進歩』に関して言えば、ベルリン・アカデミーによる懸賞論文募集が1788年、締め切りは初め1792年、その後延期され1795年（『カント事典』, 602頁）。
- (3) ベルリン・アカデミーによって公示された懸賞問題は「ライプニッツ及びヴォルフの時代以来ドイツにおいて形而上学がなした実際の進歩はいかなるものであるか」である(XX255)。
- (4) 例えば第1版の「序文」冒頭(AIXf)、また「超越論的方法論」の第1篇「純粹理性の訓練」の第2章「論争的使用に関する純粹理性の訓練」の中の「自分自身と不一致の純粹理性の懷疑的満足の可能性について」と題された箇所(A760ff/B788ff)及び第4篇「純粹理性の歴史」の末尾(A856/B884)。
- (5) これは『進歩』に限ったことではなく、すでに『批判』にも見て取れる。例えば「純粹理性自身の不可避の課題は神・自由・不死性である。ところでその学の究極意図がその学の全ての準備ともども純粹理性自身のこの不可避の課題の解決にのみ向けられている学は、形而上学と呼ばれる」(B7)。或いは「形而上学は形而上学の探求の本来的諸目的として三つの理念、つまり神・自由・不死性だけを持つ」(B395, Anmerkung)。ここでは「目的」と併せて「課題 (Aufgabe)」・「意図 (Absicht)」などの言葉に注意したい。
- (6) そこで列挙される形而上学の進歩の三つの段階——「理論的独断的前進」・「懷疑的静止状態」・「実践的定說的完成」——は、「独断論」・「懷疑論」・「純粹理性の批判主義」に対応する(XX264)。ちなみにここでカントが「独断論」として名指しで批判するのは、ライプニッツ及びヴォルフの形而上学である。
- (7) この曖昧な「存在者 (ens)」の概念が、論理的肯定としての「である」と現実の存在としての「ある」の混同の温床であると思われる。いわゆる神の存在論的証明はその好例である(XX301ff)。
- (8) カントにおける哲学は、その理念から言えば、「人間理性の目的論」(A839/B868)である。
- (9) 今言った意味で「超越的」なもの（批判的形而上学）にとっての問題ではない。このことは「形而上学」をその究極目的からみて定義したカントの視点と『哲学における目的論的原理の使用について』におけるカントの次の論述を併せて考えれば明白である——すなわちカントによれば、「自的」は「理性に直に関係を持つ」(VIII182)。というも「自的の概念に関して言えば——それはいつも我々自身によって作られているのであり、究極目的の概念は理性によってア・プリオリに作られているのでなければならない」(XX294f)からである。したがってカントが「形而上学」をその目的を考慮して「超感性的なものの認識へと進歩する学」と定義する場合もカントにとって問題なのは理性によって作られている究極目的の概念の構成要素として理性に関係するものである限りでの超感性的なものであり、超感性的な物自体ではない。
- (10) この「定說的 (dogmatisch)」と「独断論 (Dogmatism)」との混同は避けられたい。「定說的」とはたんに「確かな原理に基づく」こと、及び「ア・プリオリである」ことを意味する(BXXXV)。ちなみにハイムゼート(Heimsoeth, 1956)は『進歩』における「実践的定說的」というこの概念によってカント形而上学を特徴付けた。しかし彼は『進歩』におけるカントの言説そのものに関して詳細な検討を提示してはいない。
- (11) すなわち「私は、世界における一切の善なるものの源泉として、このものを彼自身の究極目的とする唯一の神を信ずる——私は、世界において可能な限りでの最高善というこの究極目的に、人間の力の及ぶ限り、合致する可能性を信ずる——私は、可能な限りでの最高善への世界の絶え間ない接近の条件として、未来の永遠の生を信ずる」(XX298)。
- (12) 信憑の様相に関して「信仰」を「知識」から区別することは純粹理性の批判の一つの成果である（『超越論的方法論』の第2篇「純粹理性の規準」の第3章「私見、知識及び信仰について」を参照）。
- (13) カントによれば「世界概念」とは、「誰もが必然的に関心を寄せるところのものについての概念」である(A839/B867, Anmerkung)。
- (14) もちろんこの課題は「超越論的感性論」以来の批判的認識論を通じて解決されるものであるが、その解決の最後の仕上げが《建築術》で加えられると言える。
- (15) そのためにも「越権 (Anmaßung)」による認識の拡張は徹底して批判されなければならなかったのである。
- (16) 例えば第1章第1節に挙げた（独断的形而上学）において論理的存在論が超越的実在論に通ずるのも

この種の越権行為の一つである。その場合には、カントにとっては我々の思惟形式を根底に置くに過ぎない認識の秩序が、彼らにおいては超越的な原理に基づく存在そのものの秩序と解されてしまっている。

(17) カントによれば「理性がア・プリオリに課する目的」である「理念」に従って基礎付けられた体系的統一は「建築術的」であり(A833f/B861f)、この種の体系的統一によって普通の認識を学へともたらす「体系の技術」が「建築術」である(A832/B860)。

(18) 註(8)参照。「目的は理性に直に関係を持つ」。

(19) カントによれば、形而上学は「完全に孤立的で思弁的な理性認識」である(BXIV)。

(20) 思弁的理性のみに基づいて超感性的なものを認識することが不可能なことは、《弁証論》がすでに示している。いわゆる「伶俐の規則」に従って人が超感性的なものの理念に対して客観的実在性を恣意的に付与する場合もあるが(XX298)、しかしその場合には彼は感性的欲望に従うことになる。カントにおいて「形而上学」は「純粹理性の哲学」に属するのであって(A841/B869)、したがって彼のやり方はもちろん形而上学の究極目的としての「超感性的なものの認識」とは呼べない。

(21) したがって〈人間理性の目的論〉が指定する目的に関してケンプ・スミス(Kemp Smith, 1918, p. 581)が用いた次の表現——「究極目的は人間の道徳的運命である」——は結果として正しかったと言えよう。

(22) ここにいう「狭義の形而上学」とは「自然の形而上学」とも呼ばれ、つまりは「純粹理性の思弁的使用の形而上学」である。これは本論が扱う範囲での形而上学と合致する。なおこれと対をなすのは「純粹理性の実践的使用の形而上学」としての「人倫の形而上学」である(A841f/B869f)。

(23) カントが「超越論的」と名付けるのは、「諸対象にというよりはむしろ、諸対象一般についての我々のア・プリオリな諸概念に携わる一切の認識」(A11f)、或いは「諸対象についての、ア・プリオリに可能であるべきである限りにおける我々の認識様式に一般に携わる一切の認識」(B25)である。

(24) カントにおいて形而上学はそもそも「純粹な哲学的認識の体系」(A841/B869)であり、したがって純粹な「概念からの認識」(A837/B865)のみを含んでいる。ちなみにカントによれば、自然学における形而上学による自然考察は、具体的には「物質(不可入的で生命なき広がり)」や「思惟する存在者(経験的内的表象における「私は考える」)」といった概念からの、自然についての判断となる(A848/B876)。

(25) ゆえに本論では「超越論的」という言葉について、それはア・プリオリに可能な一切の理性認識の様式に携わる認識を形容する場合にも用いられるものと考えている。註(23) (B25 からの引用) 参照。

(26) しかしだからといって、ここでの「合目的な秩序」なしには存在論も自然学も宇宙論もない、ということにはならない。しかしこの秩序なしには、本論が取り上げたカントの定義に基づく限り、存在論や自然学や宇宙論がそれだけで「形而上学」の名を得る必然性があるか否か定かではない。

文献

Kant, I. *Kritik der reinen Vernunft*, nach der ersten und zweiten Originalausgabe herausgegeben von Jens Timmermann, mit einer Bibliographie von Heiner Klemme, Hamburg: Felix Meiner Verlag, 1998.

—— *Über den Gebrauch teleologischer Principien in der Philosophie*, in: *Kant's gesammelte Schriften*, herausgegeben von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, VIII, Berlin: Walter de Gruyter, 1923, 157-184.

—— *Preisschrift über die Fortschritte der Metaphysik*, in: *Kant's gesammelte Schriften*, herausgegeben von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, XX, Berlin: Walter de Gruyter, 1942, 253-332.

Adickes, E. (Hrsg.) (1889). *Immanuel Kants Kritik der reinen Vernunft*, Berlin: Mayer & Müller.

有福孝岳・坂部恵 (1997). 『カント事典』, 弘文堂.

Heimsoeth, H. (1956). 'Metaphysische Motive in der Ausbildung des kritischen Idealismus', in: *Studien zur Philosophie Immanuel Kants: Metaphysische Ursprünge und Ontologische Grundlagen*, Köln: Kölner Universitäts-Verlag, 189-225.

—— (1956). 'Persönlichkeitsbewusstsein und Ding an sich in der Kantischen Philosophie', in: *Studien zur Philosophie Immanuel Kants: Metaphysische Ursprünge und Ontologische Grundlagen*, Köln: Kölner Universitäts-Verlag, 227-257.

Kemp Smith, N. (1918). *A Commentary to 'Kant's Critique of Pure Reason'*, London: Macmillan.